

-----  
中村和弘

2026年2月号

<南瓜の種>

ビル街に薄の穂綿浮遊せり  
海綿の真水に崩れ師走かな  
絶壁に熊の爪痕冬に入る  
冬至南瓜の種は鸚鵡に与えたり  
昆虫の血液青く去年今年  
巨船の揺れ体にのこり冬晴るる

はし

冬晴の尾は水平に馬疾走る

-----  
陸・この20句 中村和弘選

2026年2月号

核の世のひそかに餅の搗き上る	小菅	白藤
秋晴や微塵の虫の光りたり	浅沼	眞規子
半月とわたしをつなぐ羽蟻の点	岩崎	嘉子
彫り深きジャワの木椅子に秋入日	石川	真木子
橋桁に犇く鯉や天高し	本多	洋子
タンカーの喫水あらは都鳥	猪狩	鳳保
鶏頭の頭撫つれば種こぼす	安住	正子
自販機に照らされ帰る夜寒かな	古川	章雨
初時雨駆除の獣の眼にも	吉川	孝子
玄冬の眼つめたく橋わたる	朴	美代子
満月を跨いで川を渡りけり	平	恵
道横切る黒猫のみて熊めきし	松川	和子
わいわいと達磨のやうな薩摩藩	伊藤	岳栄
鯉のエサ一粒もらう小春かな	小橋	めぐみ
竹林の騒めき映る白障子	池崎	昌子
目もとから香る若武者菊人形	石井	節子
欲しかったもののひとつに蓮の骨	小田	桐妙女
紙飛行機さえも枯園鳴らしけり	三宅	桃子
雪吊りの縄切る音や空を裂く	柚木	浄子
沿線は果てなく灯り冬の霧	小林	夕里子

-----  
大石雄鬼

2026年2月号

<年 男>

元日や寝ぐせのやうな波が来る  
宝船みじかき首の神ばかり  
馬肉より我は大きく雪降る日  
セーターの首の中から年男  
耳が陽にまぎれさうなり猿回し  
工事中のやうな人から賀状来る  
猫の骨なでて初場所見てゐたり

-----  
中村和弘

2026年1月号

<赤富士>

鮭の骨砂州より白し冬に入る

りゅうぐう

龍宮城も被爆か冬の紅サンゴ  
ボクサーの筋肉を撃つ冬の雨  
棄て仏ガザの子如何に年の果  
神棚の白木の匂う歳の市  
音の良き湯桶をえらび歳の市  
鹿肉の赤富士めきし三日かな

-----  
陸・この20句 中村和弘選

2026年1月号

秋日影鳥に喰われる鳥に脚 瀬間 陽子  
破蓮池レーザー光の槍が飛ぶ 加藤 明虫  
仏法僧月の砂漠に化城あり 山本 高分子  
汗の顔カメラに晒し預金出す 荒堀 かおる  
どの声も世界にひとつ星月夜 米川 五山子  
古代より両の掌はあり木の実落つ 渡部 洋一  
難聴の吾には聞こえ秋の声 前塚 かいち  
校庭の隈の苦瓜青光り 猪狩 鳳保  
桃吹くや玉虫永久に乾きをる 藤川 夕海  
ぼんやりと飛行機を追う秋思かな 古川 章雨  
帰庫のバスに笛透きとほる無月かな 吉川 孝子  
晴れた日のとめどなく散る櫛かな 森池 義子  
サーファーの乗る波青し鰯雲 別所 弘子  
姉の剥く多面体なる酩酊 松川 和子  
懸崖に撞かれて高く菊の鞠 清水 山植子  
雀らのをどりに合はす稲穂波 藤倉 頼江  
火口湖は銀河の雫降る所 荒川 昌子  
吾もまた原罪の裔柿熟る 平 仲子  
秋の蟬しんと小暗き家に入る 小長光 吟子  
駆ける子のリュックの芒武士のごと 阿部 博子

---

大石雄鬼

2026年1月号

<鯨来る>

てのひらの形を変へて萩を刈る  
夢ますこし菊戴の晴れた空  
首筋の小川のごとし酉の市  
着ぶくれて大道芸の前とほる  
部屋着の首だらんと鷹の舞ひおりる  
白鳥のごとく夜霧に腕とほす  
喉仏よりもかなしく鯨来る

---